

カレル・ドベラーレ

木村武史(訳)

先の評議会で、まもなくチュービンゲンで開催される

C I S R (国際宗教社会学会) 会議についての議論がなされたが、その際、すでにC I S R会報(一九八六年三月号)で報告したように、議論は二つの傾向に分かれた。まず、ある参加者たちは、世俗の危機と宗教の再興をますます強調するようになった昨今の社会学者や比較宗教学者の研究を引き合いにだしながら、次のように論じた。すなわち、

——世俗化論は宗教の消滅を意味していたのではなく、むしろ、一方では伝統的な宗教形態の崩壊と、他方

では宗教の個人化を予告していた。

——世俗的意味体系のためになされた主張(それらは、暗黙のうちに伝統的宗教と正反対の立場をとっていた)は期待に應えるものではなく、その結果、いわゆる「宗教の危機」を補足するために「世俗の危機」がいわれるようになった。

——伝統的宗教意識は、以前とは異なる形態で、また新たなテーマと結びついて再び出現してきており、その一方では、いくつかの古い宗教形態が活性化している。

——現代の諸状況のもとでは、経済・政治・社会制度は多様な宗教的内容と組織形態に結びつく可能性があるということが、経験的事実によって明らかになった。

——新しい宗教運動は、現代社会においても、なお宗教が重要性をもつことを証明した。

——現代の世俗的シンボルイズムは宗教的形態を用いており、宗教的シンボルイズムは世俗の様相を呈しているなどである。

こうした主張にもかかわらず、他の参加者たちは、世俗化は依然として社会における強力な傾向であり、社会システムの活動をますます特徴づけているという、相変わらずの社会学的見解と多くの宗教家の確信に言及した。

このように膨大な論点のすべてを一回の会議で十分に論じ尽くすことは、明らかに不可能であろう。問題は四つのサブ・テーマに整理されたが、このうち第四のものは、とくに日本社会と関連が考えられる。このセッションは、議長であるバーカー博士によれば、次のよ

うな問題に答えることを目的としている。その問題とは、「世俗化の概念を非キリスト教社会に適用することはいかにして可能か(あるいは不可能か)。非キリスト教的伝統の内における世俗化について語ることは無意味だから「世俗化という用語は社会学辞典から削除すべき」なのだろうか。また、この問いは神学的なものではなく、社会学的なものである。すなわち、世俗的イスラム教徒、仏教徒、ヒンドゥー教徒が何を信じなくなったかが問題なのではなく、世俗化が進行しつつあるイスラム社会、仏教社会、ヒンドゥー社会で起こっていることについて、われわれがどの程度、役立つような論評を加えることができるかが問題である」というものである。

I

ここに提出された諸論点は、すべて根本的で興味をそそるものではあるが、議論の結果を予想することは困難である。ただ、私が望むのは、全参加者が、諸論文、討論者が指摘する問題点、総会での議論と各言語別グループでの議論から得るところがあることである。また、各

研究者が、最も難解な問題を説明する新たな道を見出すことである。本論文では、世俗化の仮説の検証をよりよいものにするために、方法論上の諸問題を考察しよう。

まず第一に、議論を混乱させている原因として、社会学者が研究の際に分析のレベルをマクロ、メソ、ミクロのそれに明確に区別しないことをあげることができる。

私は先に、この点を推し進めて、分析のレベルを全体社会・制度・個人レベルに区別することを提案した (Dobbelaere, 1981)。最後にあげた個人レベルは、個人的宗教意識の変化と、個人の宗教参加 (religious involvement) の変化を示す。これに対して、制度レベルは、デノミネーションの変遷や新たな宗教運動の出現といった宗教変動 (religious change) を示す。B・ウィルソンが強調するように、「今日継承されている世俗化論は、基本的には、社会システム操作を問題としている。世俗化するのはシステムである」(1985: 19)。

それゆえ、世俗化とは、従来社会全体に広範な影響力を行使してきた超越的宗教システムが、他のサブシステムとならぶ一サブシステムに後退させられ、その影響力

の及ぶ領域が縮小していく社会過程を意味する。ふたたびウィルソンの言葉でいえば、「宗教は(社会レベルで)他の諸制度にまさっていた主宰的地位を失った」(Wilson, 1985)のである。したがって、個人レベルにおける「聖なるものの回復」を引き合いにだしながら、社会が世俗化されたという見解を批判する研究は、明らかに要点をはずしているといえる(このような研究の概観としては、Cipriani, 1981)。もちろん、社会の世俗化が個人の意識

に与える影響についての研究は可能であり、また必要でもあるが(たとえば、Thung et al., 1985)、それは世俗化そのものの研究ではない。同様に、社会の世俗化が宗教の変化に与えた影響の研究(たとえば、Hunter, 1985: 159-160)や、世俗化された世界における宗教運動の出現の研究(たとえば、Sark and Bainbridge, 1984)も可能であり必要でもあるが、それらも世俗化それ自体 (per se) の研究ではない。

こうした方法論上の落とし穴が取り除かれても、また新たな落とし穴が現れる。それは、宗教と聖なるもののカテゴリーの問題である。P・ハモンドの次の言葉は正

しい。すなわち、「伝統的な世俗化論の端緒を開いた人々の著作を綿密に読むと、彼らは『聖なるもの』と『宗教』

を峻別しており、そのため、世俗化が宗教の衰退を意味しているとしても、必ずしも聖なるものの消滅を意味してはいないことが明らかになる」(1985: 3)と。実際、

世俗化の研究が問題としている宗教は、実体的に把握された宗教であって、機能的に理解された宗教ではない (Dobbelaere, 1981: 35-38)。それは「超経験的」、「超越的」、「来世的」(Wilson, 1985: 14)、「超自然的」な宗教について論じており、「聖なるもの」一般についてではない。したがって、宗教が超経験的ないし超自然的なものとしては考えられていない社会では、世俗化論は検証されえないのである。

最近の、主として政治学分野での研究のあるものは、世俗化論批判に向けられている。たとえば、J・ヘイドンとA・シュブは、『預言者の宗教と政治』の序文で次のように述べている。「この書は、世俗化論が現代世界における明らかに奇妙な宗教的影響の状態のすべてを説明しようとするこの有効性についての懐疑から生まれ

たものである」(1985: 3)と。彼らが扱う問題は、「アメリカの市民権運動における宗教の役割」、「創価学会の政界への進出」、「合衆国におけるモラル・マジヨリティー」、「イランをゆるがしたA・ホメイニ師率いるシーア派イスラム教の旋風」、「宗教間の闘争」、「ポーランド当局にたいするカトリック教会の抵抗」、「アパルトヘイトに対する教会の闘い」などである。また、新たな「宗教変動と社会構造上・政治上の変動を伴った劇的な事件が、いわゆる『世俗化された』工業国においてすら生じ、明らかに地球規模の新たな評価基準が必要となつていく」ことが指摘される (ibid.: 3-7)。

社会理論は客観的確証性に欠けるので(ポッパー)、新たな経験的事実に基づいた理論の検証がつねに心がけられるべきである。しかし、確かな方法論は、理論に照らしての事実の評価を必要とする。世俗化論は進化論的連鎖を示すので、順序の尺度にそつて、国々と出来事の比較を行わなくてはならない。そうするためには、まず第一に、そうした尺度を構築する際に用いる基準を考究する必要がある。本論文では、反証を単なる予感以上の水

準に高めるために、その礎となる問題を論じよう。

本題に入るまえに、次のことを強調しておきたい。それは「進化論的連鎖」(evolutionary sequence)という概念は、諸事情が同じならばある根本的な普遍的過程が世俗化を推し進めるということを示唆する簡約された方法にすぎない、ということである。ところが、D・マーティンが指摘したように、この過程は、それが生じる社会——文化複合体の性質にしたがって、おおいに異なる様相を呈する(Martin, 1978: 3-60)。世俗化過程を説明するには、個々の特殊な社会——文化的複合体も重要であるが、同様にこの過程を諸個人、諸集団や疑似集団、またその結果として起こる行為を基準として評価することも重要である。それゆえ、世俗化を考えるときには、われわれの思考から機械的かつ直線的人格を排除しなくてはならない。では、本題に戻ろう。

すでに他の個所で述べたように、世俗化を研究する社会学者たちは、現代社会における宗教の位置の変化を説明するために、暗示的であれ明示的であれ機能分化——ときには機能分離(segregation)と呼ばれたり(Luckmann,

1967)、制度的ないし構造的分化と呼ばれたりする——

と、それに伴う合理化や社会化過程に言及する(Dobelaere, 1984 and 1985)。その結果、世俗化過程が生じることを予期できるのは、たとえば、政治制度の宗教制度からの分離といった、いくつかの制度領域の分離を促進する分化過程が始まった社会においてだけということになる(Luckmann, 1967: 66-67, and 1975)。しかし、こうした分化過程は、ほとんどのイスラム教国では部分的なものであり、ホメイニ師のイランにはまったくあてはまらない。ホメイニ師率いるイラン体制は、以前の支配体制によって鼓舞された機能分化過程に対する反動であるとさえ考えることができる。D・マーティンは、「抑圧されたカトリック右派が暫時支配権の掌握に成功した右派国家統制体制」について述べるが、彼によれば、「その明らかな例は、スペイン、ポルトガル、クロアチア、戦前のファシスト・イタリア」である(1978, 45)。そして、マーティンが指摘するには、教会の各部門はおのおの独自の任務には経費がかかることを認めるにつれて、機能分化に応じ、さらにそれを開始しようとさえす

る(ibid.: 46, より広範な分析は244-277)。以上のことから、国々を比較する際には、まず第一に、サブシステムと宗教の間の機能分化の程度を考慮にいれなければならぬことがわかる。

現代社会の特徴は世俗化ではなく、いわゆる宗教の私事化(privatization of religion)であると強調する研究者がいる。N・ルーマンによれば、宗教の私事化あるいは個人化は、決断の個人化の特殊例であり、社会の機能分化が導く構造的帰結である(1977: 233-248)。世俗化と個人化という近代化の二側面は、機能分化という同一過程の結果であり、相補的過程である。実際、N・ルーマンが次のように述べていることは正しい。すなわち、機能分化した社会では、環節的社会(たとえば氏族社会)や身分階層社会(たとえば階級社会)でなされたように、人々を一つのサブシステムに「帰属させる」ことは不可能である、と。各人は、あらゆるサブシステムに等しく接近することができる。これは、個人のサブシステムへの加入はその個人が担っている他の役割によって限定されることはないということを意味する。これは包摂

(inclusion)と呼ばれる。しかし、すべての人があらゆる機能に等しく適しているということはありえないので、特殊化が要請され、専門的役割が登場する。これにより、専門的役割とならんで相補的役割があらゆるサブシステムで生じるときにのみ包摂の必要条件が満たされることになるが、諸個人がたとえわずかな期間にせよすべてのサブシステムに参加することが認められるのである。このようにして、各人が専門家として一サブシステムに参加することができ、また、公(Publicum)の一部(相補的役割)としてすべてのサブシステムに参加することができる。かくして、特殊な「公衆」——投票者、消費者、学生、信者等々——が各サブシステムに現れる。しかし、相補的役割間の機能分化もまた必要である。ところが、相補的役割の厳密な分離を統制し強制することは難しいので、決断の、個人化(Privatisierung des Entscheidens)がその機能的等価物として役立つこととなる。決断の個人化を通じて、相補的役割において可能な、ある役割結合が目指される。しかしながら、そうした結合は個人的レベルにおいてのみ生じるのであって、ただ

個人の動機に対して効果を持つだけである。もしそうでなければ、そのような結合は機能分化を破壊してしまうだろう (Dobelaere, 1984 も参照)。

以上の議論から、個人化は私的選択ではないことが明らかであろう。個人化とは構造的帰結であり、それは社会がこうした構造の結果に対応するように強いるものである。個人の動機は、行為の一般的象徴的あるいは規範的コードによつては統制されえないので、人は因果的に適当なやり方では対応できないという事実にかんがみると、順応的・修正的・補正的対応だけが可能である。このことは、サブシステムとしての宗教にある帰結をもたらず。宗教においては、教会、デノミネーション、セクトは成員の個人的動機を統制することができない。その結果、成員に順応する政策をとらざるをえない。N・ルーマンは、儀礼の刷新、サクラメントの再強調・再神話を扱った研究の例としてB・ウィルソンをあげている (Wilson, 1969: 160)。さらに、成員の世話をする代理機関は、成員を宗教そのものよりも宗教システムによりよく結びつけるだろうし、宗教組織はますます補助的

機能にのりだし、柱状化構造の構築を敢行するだろう。

柱状化 (Pillarization) は、十九世紀後半にベルギーで急速に進展した機能分化過程にたいする、極端な対応であった。それは、反動政策であった。すなわち、教会と一部のカトリック聖職者のエリートたちが、世俗社会から隔離されたカトリック世界の構築に着手したのである。実際、彼らは、より古い分化の過程——環節的分化 (segmentary differentiation) の過程——に逆戻りした。機能分化の衝撃をくい止め、ベルギーのカトリック教徒への統制力を堅持するために、教会から分化した諸部門におけるサービスが繰り返されることとなった (Dobelaere, 1979)。他のヨーロッパ諸国でも、同様の過程が生じた (Righart, 1986)。

一世紀後、「カトリックの柱」はオランダで揺らぎ始めた (Thurings, 1978)。ベルギーでは、J・ピリエットと私が指摘したように、最終的にはこの柱状されたカトリックの構造もまた機能分化過程に適応せざるをえなかった。たとえば、学校や病院における「カトリックの柱」の奉仕組織はますます特殊化し、増加する信徒の専門家

が、減少する宗教家の専門家にとつてかわつた。組織的に、宗教は周辺に押しやられ私事化した。こうした変化の結果、教会員、依頼人、専門家にたいする教会の統制力は、それらの人々の個人的動機に影響するということだけに縮小した。そして、専門家たちは、「私的—公的」というイデオロギー概念を用いて他のサブシステムへの参与 (私的) と専門上のサブシステムへの参与 (公的) とを、区別することによって、自らの包摂を守った。柱状化構造はこれを受容せざるをえなかった。こうして残されたものは、広範な範囲におよぶ「カトリックの柱」組織による、公的立場の正当性や倫理的規範の公的形式に対する厳密な統制であった。そして、これらは今なお進められている (Dobelaere, 1979: 46-61; Dobelaere et al, 1978; Dobelaere and Billiet, 1983: 158-177, and Dobelaere, 1982)。

同時に、新たな「集合意識」が確立された。それは「社会—文化的キリスト教」と呼ばれる。その核となる諸価値は次のようなものである。すなわち、一方では憲法上定められている集会と選択の自由に基づく垂直的多元主

義 (vertical pluralism) の合法化であり、他方ではいわゆる福音的価値におけるキリスト者のアイデンティティの明瞭化、つまり、信者に対する慈悲深い接し方、あるいはキリスト者の組織の共同体性 (Gemeinschaftlichkeit) である。また、周辺の人々にとくに目を向けた社会諸階級間の連帯、個人・家族・隣人への関心の集中 (この点についてはとくにVoye et Rémy, 1985を参照)、有効な資産の合理的経済的利用、換言すれば、贅沢の排除と儉約の奨励であり、社会正義の実現 (Dobelaere, 1982a: 144-151) である。こうした「聖なる天蓋」はいよいよキリスト者を示す「C」によつて象徴的に表現される。つまり、より限定的で制約的であると考えられるカトリックに、福音がとつてかわるのである。カトリック教会への参与者の激減という事態に直面して、「柱」は聖職的性格を放棄し、その代わりにキリスト者というオーラを身にまとった。換言すれば、その「柱」は、任務を推進するために、ベルギーの人々の「宗教参与」の減少に「宗教変動」をもつて適応したのである。

一九八六年の今日でも、「世俗化された」集合意識は、

影響力の絶大な関連団体のチャンネルを維持しえているようである。すなわち、依頼人が増大することにより、「柱」に支給される政府の助成金も増額され、それによって「柱」がよりよいサービスを供給することができたのである。しかし、S・ロッカが指摘しているように、制度化された「柱」には二つのチャンネルがある。一つは団体のチャンネルであり、もう一つは選挙のチャンネルである(1977: 563-564)。一九八〇年以降、選挙チャンネルは崩壊している(Biliet and Dohelaere, 1985)。選挙チャンネルは有権者の二五%を失っただけではなく、団体チャンネルで働く人々の多くはキリスト教人民党と団体チャンネルの間に介在する特権的關係に異議を唱えている。その結果、キリスト教的団体チャンネルに属している大多数の依頼人と会員そして多くの幹部は、キリスト教人民党をキリスト教的団体チャンネルの適切な代表として認めることを拒否している。V・ヴァン・デヴァルドは、最近のフレミッシュ・タウンの研究において、キリスト教的法人チャンネルを形成している組織の委員会はキリスト教人民党のみならず、フレミッシュ

国民党やフレミッシュ緑の党にも関係していることを明瞭に示している(1985: 166-171)。これは、キリスト教の「柱」の非制度化の始まりであろうか。あるいは、キリスト教的団体チャンネルは、その構成組織の会員や代表者会議のメンバーが新たな政治的選択をしたり参加したりすることを容認することができるのであるか。他の国々においては、世俗化過程を防止するために、これよりも穏健な政策が用いられた。各デノミネーションの指導者は新たな社会運動に着手したが、その下に集まる人々を法人あるいは政治チャンネルに組織化することはできなかった。これは宗教集団の影響力が後退していることを示すもう一つの例である。宗教集団はもはや人の群れを柱へと組織化できる立場にはないのであり、このことはまた世俗化の進展を雄弁にものがたっている。

II

最近、研究者たちによって、新キリスト教右派(NCR)はそうした運動の一つであり、世俗化過程への反動

であると論じられている。まず第一に、政治にこのように関連をもつことは新しいことではなく、「リベラルなプロテスタンティズムとカトリシズムは久しく政治的に行動してきた」(Hadden and Swann, 1981: 151)。そうした運動の指導者たちは、政治的聖職者への影響力を行使するために人々を動員しようとするだけである。たとえば、宣言が採択される。手紙が候補者や代議士に送られる。大会が組織される。彼らは会議に出席し、メディアを利用し、候補者の支持・不支持を発表する(*ibid.*: 133)。議員がいわゆる「主要な道德的問題」に関して何回正しく投票したかを示す「国会報告カード」が作成される(*ibid.*: 139)等々。新キリスト教右派が用いた戦術はとくに新しいものではないけれども、政治に参与した点はい新しい(Wuthnow, 1983: 168-174)。こうした新しい社会運動に関する研究がいくつか発表されている(たとえば Lieberman and Wuthnow, 1983; Bromley and Shupe, 1984)。これらの研究に基づいて、次のように結論することができよう。すなわち、NCR運動の出現を刺激し助長したのは、以下の諸状況——たとえば、私的道德と公益の

区別を曖昧にさせたウォーターゲート事件、福音派をますます公認させることになったカーター選挙、NCRを選挙の潜在的支援源とみなしたレーガンを含む新政治的保守主義者たち、リベラルな福祉政策は失敗したという認識、州と法廷による逸脱したライフ・スタイルの正当化、主流派教会の神学と倫理の相対主義(Wuthnow, 1983: 175-180; Harper and Leicht, 1984: 106-109)であるが、この運動は組織的にはテレビ教会(Electronic Church)の発達(Hadden and Swann, 1981)と、地方のファンダメンタリスト教会(Liebmann, 1983: 69-73)によって支えられている。かれらは「世俗的ヒューマニズム」に反対したのであるが、それは、彼らが気づいていたように、神中心のというよりはむしろ人間中心のであり、アメリカにおけるキリスト教の伝統に反するものであった。いくつかの研究は、NCRが闘っている敵を示すために「世俗」や「世俗化」という用語を用いている(たとえば Simpson, 1983: 203-205, and Heinz, 1983: 143-146)。

ここに、本論文の冒頭で述べたこと——世俗化とは直

線的性格をもつ機械的過程ではないということ——のよい例をみるのである。この過程は、牧師や教会員のよう自身の評価を世間に伝達するために有効なチャンネルを用いる諸個人によって分析され評価されている。NC Rは「世俗的ヒューマニズム」に反対しており、聖なる価値を否定するライフ・スタイルに合法的手段を用いて抗議している。このような社会運動の成功は、大部分、彼らが動員することのできる人数と、主要問題と方法について満場一致で合意に達することができるか否かにかかっている。

結局は、機能分化は個人化と世俗化をさらに促進するだろう。柱状化構造はこれらの過程を「防ぐ」ことはできなかった。教会とシナゴグは多くの会員、とくに青年層を失ったので、効果的にこれらの過程を抑止することはできない。しかしこれは、宗教集団が降参したということを意味しているのではない。いくつかの新しい宗教運動は、自らの旗印のもと社会の再聖化を行っているが、たとえば統一教会のように、会員数は極めて少ない。また、教会の大部分は世俗化を完全に受け入れたわけで

もない。教会、とくに福音派教会は世俗化と闘い、また、教会やデノミネーション内の一部のグループは社会とそのサブシステムの再聖化を推進したいと考えている。カトリック教会内部でも、「解放の神学」や「神の御業」(Opus Dei)を指摘することができる。ここでもまた、これらの運動の存在を指摘するだけではなく、それらの影響を評価すべきであろう。東欧における教会の位置は、これとはまったく異なっている。東欧では、イデオロギー上の理由から「党」が機能分化を防止しているし、人々は政治的「サブシステム」の卓越性を受け入れざるをえない。不可知論的制度への反対意見が、ポーランドにおけるカトリック教会の当局への反抗のように、宗教を通じてしか聞かれないのはまったく当然のことである。

〈結 論〉

以上、世俗化過程の潜在的な一般的過程を探究し、世俗化の程度を予想するために社会を計測する基準を見出すために、いくつかの研究を扱ってきた。このようにすれば、われわれの研究は単なる予想以上の水準に達し、

より信頼できる理論的検証が可能となるだろう。

第一に、機能分化を評価する際に用いる尺度を發展させようと試みるべきであり、社会の異なるサブシステム間にある役割体系と役割期待の分離の程度を測る基準をさがすべきである。このことからさらに、異なる主要制度間にある専門的役割と相補的役割の發展の分析へと進むべきである。そして、異なるサブシステムにおいて達せられる包摂の程度を確証しようと試みるべきである。達せられた機能分化の程度を示す他の尺度として、異なる制度の機能的合理化のレベル、サブシステムの社会化のさまざまな程度、そして決断の個人化をあげることができる。

それから、仮説を経験的に検証する必要がある。「機能分化が進展すればするほど世俗化も進展する」という仮説は、教会、シナゴグ、デノミネーション、セクト、カルトという宗教集団が、第一には社会の他の制度を統制する諸規則に対する影響力をまったく持たないか、あるいは持ったとしても減退の一途であろうことを意味している。換言すれば、宗教的価値に基づいた伝統的な宗

教的規則や規範は、世俗的規範にますますとって代わられているか、あるいは他のサブシステム——たとえば教育、家庭、政治、経済、科学の各領域——ですたれてしまいうだろうということである。第二に、高度に分化した社会では、市民の個人的動機におよぼす宗教の影響力は、未分化な社会と比べると小さいだろう。これは、人目をひく宗教的少数者の存在を除外することではない。問題は法制定や法の適用、裁判の判断、伝統的慣習の保持などに対するその影響力である。この影響力を研究するためには、権力と影響の研究に用いられるインスピレーションとモデルを見出す必要がある。この点に関しては、とくに、ダールの次の二つの方法を取り上げたい。一つは、エゴに影響される変わり者の特殊な行動の可能性の増大を計測する「権力」へのアプローチであり、もう一つは権力が行使される範囲を計測する「権力の範囲」へのアプローチである(1957: 203-205)。この文脈において、間システムと内システムの比較という問題が生じるが、すでにいくつかの解答も出されている(Harsanyi, 1962)。最後に、資源移動理論からも有益な提言を得る

ことができる。このように、それは「社会運動の構造を研究し、目的達成のために資源がどのように動き操作されるか」を研究してゐるからである (Hadden, 1985: 6)。

参考文献

1. BILLET, J. and K. DOBELLAERE, Vers une désinstitutionalisation du pilier chrétien ? In L. VOYE et al. eds. *La Belgique et ses Dieux: Eglises, mouvements religieux et laïques*. Louvain-la-Neuve : Cabay, pp.119-152, 1985.
2. BROMLEY, D.G. and A. SHUPE ed., *New Christian Politics*. Maccon: Mercer University Press, 1984.
3. CIPRIANI, R., Sécularisation ou retour du sacré. In *Archives de Sciences Sociales des Religions*, 52(2): pp. 141-150, 1981.
4. DAHL, R. A., The Concept of Power. In *Behavioral Sciences*, 3(2): pp. 201-215, 1957.
5. DOBELLAERE K., Professionalization and Secularization in the Belgian Catholic Pillar. In *Japanese Journal of Religious Studies*, 1-2(6): pp. 39-64, 1979.
6. Do, Secularization: A Multi-Dimensional Concept. In *Current Sociology*, 2(29): pp. 1-213, 1981.
7. Do, Contradictions Between Expressive and Strategic Language in Policy Documents of Catholic Hospitals and Welfare Organizations: Trials Instead of Liturgies as Means of Social Control. In *The Annual Review of the Social Sciences of Religion*, 6: pp. 107-131, 1982.
8. Do, De Katholieke zuil nu: Desintegratie en integratie. In *Belgisch Tijdschrift voor Nieuwste Geschiedenis*, 13: pp.119-160, 1982a.
9. Do, Secularization Theories and Sociological Paradigms: Convergences and Divergences. In *Social Compass*, 2-3(31): 199-219. 譯註等記「世俗化諸理論と社会学論ベトナム——収斂理論と拡散理論」『東洋学術研究』第115巻第1号、一九八六年、一一三—頁。
10. Do, Secularization Theories and Sociological Paradigms: A Reformulation of the Private—Public Dichotomy and the Problems of Societal Integration. In *Sociological Analysis*, 4(46): in press, 1985.
11. DOBELLAERE, K. and J. BILLET, Les changements internes du pilier Catholique en Flandre: D'un Catholicisme d'Eglise à une Chrétienté Socio-culturelle. In *Recherches Sociologiques*, 2(14): pp. 141-184, 1983.
12. DOBELLAERE, K., J. BILLET and R. CREVE, Secularization and Pillarization: A Social Problem Approach. In *The Annual Review of the Social Sciences of Religion*, 2: pp. 97-124, 1978.
13. HADDEN, J. K., *Religious Broadcasting and the Mobilization of the New Christian Right*. Presidential Address delivered to the Society for the Scientific Study of Religion, October 26, Savannah, Georgia, 1985.
14. HADDEN, J. K. and A. SHUPE, Introduction. In J. H. HADDEN and A. SHUPE ed., *Prophetic Religion and Politics*. New York: Paragon House Publishers, in press, 1985.
15. HADDEN, J. K. and Ch. E. SWANN, *Prime Time Preachers: The Rising Power of Evangelism*. Reading: Addison-Wesley Publishing Company, 1981.
16. HAMMOND, P. E., Introduction. In P. E. HAMMOND ed., *The Sacred in a Secular Age*. Berkeley: University of California, pp. 1-6, 1985.
17. HARPER, Ch. L. and K. LEICHT, Explaining the New Religious Right: Status Politics and Beyond. In BROMLEY, D. G. and A. SHUPE ed., *New Christian Politics*. Maccon: Mercer University Press, pp. 101-110, 1984.
18. HARSANYI, J. C., Measurement of Social Powers, Opportunity Costs, and the Theory of Two—Persons Bargaining Games. In *Behavioral Sciences*, 1(7): pp. 67-80, 1962.
19. HEINZ, D., The Struggle to Define America. In R. C. LIEBMAN and R. WUTHNOW ed., *The New Christian Right*. New York: Aldine Publishing Company, pp. 133-148, 1983.
20. HUNTER, J. D., Conservative Protestantism. In P. E. HAMMOND ed., *The Sacred in a Secular Age*. Berkeley: University of California Press, pp. 150-166, 1985.
21. LIEBMAN, R. C., Mobilizing the Moral Majority. In R. C. LIEBMAN and R. WUTHNOW ed., *The New Christian Right*. New York: Aldine Publishing Company, pp. 49-73, 1983.
22. LIEBMAN, R. C. and R. WUTHNOW ed., *The New Christian Right: Mobilization and Legitimation*. New York: Aldine Publishing Company, 1983.
23. LUCKMANN, T., *The Invisible Religion: The problem of Religion in Modern Society*. New York: Macmillan, 1967.
24. Do, On the Rationality of Institutions in Modern Life. In *Archives européennes de sociologie*, 1(16): pp. 1-15, 1975.
25. LUHMANN, N., *Funktion der Religion*. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1977.
26. MARTIN, D., *A General Theory of Secularization*. Oxford: Blackwell, 1978.
27. RICHART, H., *De katholieke zuil in Europa: Het ontstaan van verzuijing onder katholieken in Oostenrijk, Zwitserland, België en Nederland*. Meppel: Boom, 1986.
28. ROKKAN, S., Towards a Generalized Concept of "Verzuijing": A Preliminary Note. In *Political Studies*, 4(25): pp. 563-570, 1977.
29. SIMPSON, J. H., Moral Issues and Status Politics. In R.

- C. LIEBMAN and R. WUTHNOW ed., *The New Christian Right*. New York: Aldine Publishing Company, pp. 187–205, 1983.
30. STARK, R. and W. S. BAINBRIDGE, *The Future of Religion: Secularization, Revival and Cult Formation*. Berkeley: University of California Press, 1984.
31. THUNG, M. A. et al., *Exploring the New Religious Consciousness: An Investigation of Religious Change by a Dutch Working Group*. Amsterdam: Free University Press, 1985.
32. THURLING, J. M. G., *De wankele zuil. Nederlandse kerklieden tussen assimilatie en pluralisme*. Deventer: Van Loghum Slaterus, 1978.
33. VAN DE VELDE, V., *Zuijstructurele determinanten van de politieke besluitvorming in een lokale samenleving: Een case study in Konlich*. Leuven: K.U. Leuven, Department of Sociology, Licentiate-thesis, 1985.
34. VOYE, L. and J. REMY, "Perdurance de clivages traditionnels et différences d'enjeux prioritaires". In L. VOYE et al. eds., *La Belgique et ses Dieux: Eglises, mouvements religieux et laïques*. Louvain-la-Neuve: Cabay, pp. 153–173, 1985.
35. WILSON, B., *Religion in Secular Society: A Sociological Comment*. Baltimore: Penguin Books, 1969.
36. Do, Secularization: The Inherited Model. In P. E. HAMMOND ed., *The Sacred in a Secular Age*. Berkeley: University of California Press, pp. 9–20, 1985.
37. WUTHNOW, R., The Political Rebirth of American Evangelicals. In R. C. LIEBMAN and R. WUTHNOW ed., *The New Christian Right: Mobilization and Legitimation*. New York: Aldine Publishing Company, pp. 167–185, 1983.

(コーン教授)

(ちゅうたいし・筑波大学大学院)